

「秀範—聖海」の相承血脈をめぐる

——十三世紀中期頃の「動き」を探る——

牧 野 和 夫

はじめに

日本中世の十三世紀後末・十四世紀初における聖教資料の調査研究の展開について特筆すべきは、地方の拠点寺院の悉皆調査報告の過程で極めて重要な典籍資料の存在が多数確認されつつあることである。しかも近時、益々増加傾向にある。

襲蔵・転蔵を含めた通蔵の「動き」は、鎌倉中後期以降、室町・戦国、更に近世から幕末近代に至るまで止まず（今も止まない）、極めて入り組み、複雑にして多様・多彩である。いずれの通蔵過程にしろ、この豊饒な沃野から発掘される「僧」達は、ほとんど京洛の権門寺院の文字資料に到達することのない中世の時空を実に活発に「動き」やま

なかつた人々であった、と云つてよい。

十三世紀後期から十四世紀初期にかけて活動の顕著な僧に「円海—秀範」の相承を以て知られる秀範がいる。この秀範の「動き」には、十三世紀後期に認められる、多くの「動き」が備わっているように思う。「神道」・「遁世」・「顕密」・「口伝」・「兼修」などなど、とりわけ行動半径の広さには留意されるのである。遁世僧の行動半径の広さを測るには、彼らの「動き」のほとんどが京洛の権門寺院の文字資料を漏れる形で行われるので困難を伴うが、京洛を離れた地方拠点寺院には少なからずその足跡を拾うことができる。

一、弘長期の「秀範―聖海」の相承

秀範については、古くより研究の対象となっていた。「良含―円海―秀範」という相承血脉についての中世神道史研究の側からの研究には、長く深い蓄積がある。久保田収、西田長男、大山公淳、櫛田良洪を始めとした研究の軌跡は重い。伊藤正義氏の提唱になる「中世日本紀」を軸にした一九七〇年代以降の研究を含めた動向は、伊藤聡氏「中世神道・中世日本紀研究の現状」〔歴史評論〕816号2018・4に的確な記述をみる。とりわけ「円海―秀範」の師資相承の動きを追う上で、金沢文庫にて開催された中世神道資料の展示・翻刻紹介（『図録 金沢文庫の中世神道資料』（1996）津田徹英氏担当）は、多くの新知見を提供するものであった。

讃岐国三豊の弥谷寺の所蔵する聖教群は、東京大学史料編纂所の調査撮影蒐集による紙焼き資料の公開、先立って田中博美氏「弥谷寺所蔵の三宝院流聖教（甲）」（『醍醐寺文化財研究所紀要』8号1986）に展開された概要（その一部である『傳心記』については、近世の転写本に遭遇し、既に紹介・活用していたことは、「縁」と云うべきであろう。「疑経・仮託などの周辺」〔『実践国文学』60号2001・10〕）などにより、その重要な資料的な価値が

知られていたが、個々の資料については、十分に検討活用されていなかった。特に「円塔」などの豊富な情報（「思融」「円塔」などの法脈に新たな中世文学解明へ展開する可能性を認めていた筆者にとって、考慮すべき資料群であり、若干の注記・口頭発表を試みたが、誤解を招きかねない訂正すべき記述も一部、認められた。近時、訂正を簡略に記し、更に牧野和夫「思融の周辺に「本空」という僧侶がいたこと」〔『実践国文学』94号平成30・10〕と題して概略を予告し、口頭発表（延慶本の会、2018・12）を行ったのも、その故である。さらに、弘長期の「秀範―聖海」相承の弥谷寺蔵聖教を奇跡的に発掘しえたので、鶴見大学図書館蔵の同様な資料一点を併せて、牧野和夫「秀範―聖海」相承（地方拠点寺院蔵）資料の周辺―近時過眼資料の紹介と展開―」（福田晃氏編『唱導資料研究』近刊所収）と題した報告論文を寄稿した。その一層の展開の一端を過日報告した（伝承文学研究会例会、2019・5・11）が、この稿では別の視点から弘長期の「秀範」の「動き」について検討したい。ここで採り上げる典籍二点は、いずれも十四世紀以降長く京洛の東寺に蔵するところの聖教であったか、と推定されるものである。この間の経緯の詳細は、福田晃氏編の前掲資料集に掲載予定稿をご参照頂きたいが、一応、書写奥書を含めた識語など必要最小限の紹介を

左記報告論文から引文する。

① 弥谷寺藏『勸流／（梵字） □□□□ □伝 上下』

二帖

「下帖末に「貞和三年初冬上旬之候賜師主上人之御本謹書写交合／金剛子本円」とあり、字体から本円自筆校合の一点であろうか、と思われる。内題を「大勝金剛頂品第八」と作る、その帖末の本円書写校合奥書の前に、本文の末に「建保六年戊刀自六月三日至于／同年十二月廿三日伝受了」として「佛子道円」の伝受識語が続き、改行して「（鈎点）梵字^レ云初於師所三度雖請傳／受不被許之其後許可之／後八十年之間伝授之一年一品／二品一日秘決一兩等云々於我流／以此為至極大事云々」と「^レ丸」の口伝が記されて終わり、その丁裏には文字なく、改訂して「弘長元年十一月廿三日以聖海／上人御本書写了」とある。」

その後に行空けて、先に紹介した本円の書写校合の奥書が続くのである。

② 鶴見大学図書館藏『光明真言口伝』一軸

『鶴見大学蔵貴重書展観解説図録 古典籍と古筆切』（平成6・10 鶴見大学）頁39に、書影が掲載され、「（東寺旧蔵伝授書）」と注記される一点で、頁85の解説には次のように記述される。

「51ハ 光明真言口伝 弘長四年写（盛深筆）」

卷子 一軸

本文料紙、斐楮混漉。紙高一七・八糎。東寺旧蔵。表紙を欠き正確な書名は明らかでないが、奥書から醍醐寺座主・東寺長者実賢（一一八〇—一二四九）の口受を、弘長四年（一二六四）二月八日、高野山尺迦院南房において盛深が書写したものであることがわかる。端裏書に「光明真言口伝実」とあるが、「光明真言口伝」「光明真言法曼荼羅」「光明真言法護摩」からなる。

光明真言の機能について『不空絹索經』は、十惡五逆の重罪を犯したもので、光明真言で加持した土沙をその屍や墓の上にかけると、罪障を除滅し無上菩提を得るとするが、白河院・美福門院・後白河院・鳥羽院二条院妃・建春門女院の中陰にあたり、その得脱をねがい勝覺・源運・勝憲・実範・義範・勝憲によって修せられたことがわかる。

（納富）

（奥書）

本云

承久二年庚辰正月廿五日

私師云

此書ハ醍醐座主東寺一長者

前大僧正御房實賢御口受

也最秘々々努々

弘長四年甲子二月八日於高野

山尺迦院南房寫書了

求法沙門盛深

」

と記す。①②のいずれの資料にも梵字一文字「**𑖀**」の口伝が重要な役割をはたしている。この「**𑖀**」を誰に比定するか。この問題は、家藏「近世前期」写『法隆寺舍利相伝他』一軸の内の「聖徳太子大事・太子御入定事」という項目に「**𑖀**云**𑖀**者見性房／秀範反字礼也」という**𑖀**阿その人の証言の記述に拠って、秀範のことであることが判明している（図1）。詳細は、前記近刊予定の福田晃氏編『唱導資料研究』所収稿に譲る。①に拠って弘長元年十一月廿三日以前に、おそらく「秀範」から「聖海」へ伝授された「聖海上人御本」が存していたことは、確実である。既に「秀範―聖海」という相承奥書をもつ聖教類が紹介されており、その数は少なくない（大東敬明氏「神道切紙と寺社圈」『中世寺社の空間・テキスト・技芸』）。②も、「**𑖀**」が秀範であり、弘長四年の盛深の書写奥書があることで、弘長四年（1264）以前に秀範の係った口伝資料の存在が確認できたのである。弘長二年（1262）以前に「秀範―聖海」という相承伝授の関係が成り立っていたことを証する文字資料が見いだされたのである。

図1

稱名寺藏『三代別記』の書写奥書を辿るならば、「秀範—聖海—惠劍」という書写相承の流れが知られる。しかも「秀範—聖海」授受相承伝授の年を拾うならば、正和元年（1312）である。新出紹介の奥書類に拠って「秀範—聖海」授受相承の關係は、既に四十余年前の房総にも遡る「繋がり」があったことになる。

二、家藏『一完乃題れ治ウ乃題旨』の「れ口」について—禅恵・劍阿—

稱名寺藏『三代別記』の書写奥書は、

「延慶元年十一月二十二日

正和元年四月二十（虚—／金—）於千葉庄堀内禪室
応良上人之懇請令奉授両部秘契畢、小比丘 秀範

元亨二年^{壬戌}八月廿二日（鬼—／日—）於千葉庄堀
内禪室応元上人之懇請令奉授両部秘契畢、小比丘 聖海」

とあり、次に「暦応元年十月廿一日於千葉庄堀内光明院
応大福寺證寂長老之懇請令奉授両部秘契畢、小比丘 惠劍」とある。秀範を知るうえで「聖海」・「惠劍」という僧侶の「動向」を探ることが重要であるが、京洛を軸とした文字

資料に比してこの種の資料は極端に乏しい。幸い、「惠劍」については小笠原長和氏も「下総千葉氏と稱名寺僧（一）」（『金沢文庫研究』106号）「僧惠劍について」で紹介されたが、櫛田良洪氏「関東に於ける東密の展開」（『真言密教成立過程の研究』〈昭和39・8 山喜房佛書林刊〉）に次の記述（頁618）があるので、引文しておく。

劍阿のやや後輩と思われる僧に賢空房（元空房）惠劍がある。彼は声明源流記にその名を止めた声明家であつたが、劍阿から付法を屢々受けて正和五年十一月十四日保寿院流を重受し、元応二年正月二十九日三宝院流の正受者であり、また元徳三年九月二十七日勸修寺流の正受者に拔擢せられたほど他の学僧より格段重んぜられた。彼はその後下総に遊んで千葉堀内方面で聖海を訪れ、元亨二年八月二十二日元瑜方西院の伝法を受け、また十一月の頃には称名寺に帰り、劍阿が湛容の爲めに西院の灌頂壇を構えた時その教授職となり、また嘉暦元年の保寿院の灌頂に唄師・教授・呪願の三役を一度に果した如く、仲々法燈にも通じた人であつた。殊に声明の耆宿であつただけに灌頂には誦經導師の任を務め法会の晴れ役を続けた。従つて称名寺の法要に当つては賢空房の位置は高く、また法蔵も重く、他の僧を常に指導した。晩年称名寺を去つてから

その行方は詳でないが、千葉か下総方面に住した様である。西院元瑜方を相伝した三代別記によると、暦応元年十月千葉堀内光明院で大福寺証寂の懇請で兩部の秘印を授けているからなお健在であった。康永三年にもなお活躍した様であるから前後四十年間の生存は知られる。恵劔は華嚴教学にも心を傾けた人で華嚴探玄記を開板し、これを称名寺にも寄附した事が湛稿の奥書で知れる。彼は相当長く金沢称名寺と深い関係を有した人で、古くは徳治二年三月十四日極樂寺長老道会が称名寺で祐範に西院伝法灌頂を営んだ時讃頭の劣い地位に列っており、同十六日の三宝院流の灌頂では散花師の晴れ役を果すなど余程若い時代より称名寺に係しており、多才な学僧であったといつてよい。

聖海・恵劔の活動範囲は、称名寺を除く房総の千葉荘内堀に限られており、弘長頃の秀範と聖海とのかかわりも、房総の地において成立していた、と考えるのが自然であろう。稱名寺初代審海が係わった寺院には房総の地に点在する寺院が少なからず存在する。

弘長頃の秀範が稱名寺と緊密な地理的位置にあった房総を活動拠点にしていた可能性を考慮するならば、俄かに十三世紀中後期の秀範の「動き」が看過しえないものとな

る。秀範には、金沢稱名寺に「ゆかり」をもち、しかも極めて重要な位置を占めていた、とも推測できる資料があるからである。既に影印紹介を済ませた家蔵『一完乃題^レ治ウ乃題^レ旨』一軸である。『金沢文庫研究』280号(1978・3)所収牧野和夫『一完乃題^レ治ウ乃題^レ旨』影印・紹介―審海・釵阿の一資料―に書誌的な事項を簡略に記したので、再度引くことにする。

まず、簡単な書誌を記しておくならば、淡茶地裂後補表紙(高さ約十三・〇糎、近現代の書肆の手に係るか。)。白紙を貼り、「一完…(略)…文保元年忍空ノ奥書アリ」と近代の墨書。見返しは淡藍色の楮紙で幅十三・五糎。見返しに厚手の紙を貼り黒のボールペンにて「忍空上人」と記し下三行に略歴を記す。見返しから本文料紙迄の幅約七・六糎は、総裏の厚手楮紙を以て補う。端裏外題「一完 口口」との本文同筆墨書は、裏打が削られ判読可。料紙端から七・七糎幅をおいて内題・本文初行、「一完乃題^レ治ウ乃題^レ旨 ^レ口口云 ライ(梵字二字)ケン乃御傳 ……」無辺無界、字面高さ約十一・二糎、幅四三糎内外の楮紙五枚を継ぎ、毎紙約二一行、行字内外字数不等。料紙はやや薄手の楮紙、虫損甚しいが、おそらく総裏を打つ以前のことらしく裏打には虫損なし(近現代の手に係る)。本文末(第

四紙二〇行目)、尾題なく一行あけ「相承次第」と標して成賢から威に至る相承血脈を附し「^レ口口云」の一条を六行にわたり記す。本奥「正和五年丙辰十月十二日 於^レ中奉傳受了」と本文同時同筆にて記し、更に「文保元年丁巳季夏中旬 奉傳受了 忍空云々」と本文同筆にて記すも、やや墨色が濃い。時を隔てぬ別時同筆か。おそらくは室町頃の書写か。

という記述である。「室町頃の書写か」としたが、おそらく室町も初期の頃であろう。近現代の書肆(個人)あたりの粗い後補表紙などの「具合」から、逆に東寺旧蔵と推定されるものである。本書の特異な点は、既に指摘した如く漢字・片仮名を交えて試みた梵字による仮名表記・漢字音表記にある。正に秘口伝に最も適うものと云えようが、筆者は管見にして今も他に見聞していない。

若干付言するならば、この小巻子の形態は、金沢文庫保管稱名寺蔵聖教の口伝・秘事の授受において見られる典籍形態のひとつであり、東寺寶菩提院旧蔵の聖教類にも顕著に見られるところであるが、讃岐覚城院蔵信源書写の口伝・秘事類にも見出されるなど、中世寺院資料の書物形態のひとつとして留意すべきものであろう。

『一完乃題^レ治ウ乃題^レ旨』の内容については、「秀範」を聖教の相承授受に限定して追尋する本稿の狙いの範囲を超

える故、後考に譲るとして、「**丸口**」と冠して伝授本文末に付された「此題旨自上古秘藏故／審海不授**釵阿**」^ニ「**禪惠**／不授**丸**」^一也而**禪惠**請^{シテ}**釵阿**／乃付属^ト之時結句^ニ授此題／旨如是所重^{スル}也寫瓶之外／不被授之」という口伝に注目する。語られる内容は、極めて重いものである。稱名寺長老審海が、「自上古秘藏故」**釵阿**に授けなかったこと、**禪惠**は**釵阿**を請じて「付属」し、**丸**（秀範）には伝授しなかったこと、を秀範自ら当事者として語っているかの如き口吻である。伝授本文末には、「**丸口**」の前に「相承次第」が記され「成賢 ライ（梵字二文字）賢 憲静 審海 禪惠 **釵阿** **丸**（梵字一文字）威」とある。ここに**禪惠**という僧侶が係わっていることになる。「**禪惠**」については、**釵阿**の稱名寺長老就任を巡って百瀬今朝雄氏「明忍房**釵阿**の稱名寺長老就任年代」（『三浦古文化』13号1973:3）に重要な指摘がある。同論文において「嘉元二年六月十三日の審海入滅後、延慶元年十一月に至る四年余りの間に、稱名寺長老が在任していたことは」、高梨氏がすでに指摘されている、と先行論文を踏まえた上で「**釵阿**の稱名寺長老就任の年代を、延慶元年十一月三日より同十一月十一日の間と推定」されたが、更に同論文注（5）に次のような指摘をされている。高梨氏の「この長老に戒円房祐範を想定されたことには賛同しえない」として、高

梨氏の論拠二点を検証された上で、新たに二点の論拠を挙げて「戒円房よりは、右に掲げた意味不明の貞顕書状にみえる「尊定上人」こそ長老にふさわしいものと想像する」とされた。**禪惠**の存在を介して、審海・**釵阿**の相承を巡る一件に秀範も当事者として係わっていた、という推測が成り立ちそうである。大和室生寺における「秀範—**釵阿**」の相承の次第には、房総と稱名寺間に展開した、必然とも云うべき十二分の前史があったのである。

結び

百瀬氏は、審海の稱名寺長老退任後、**釵阿**の長老就任以前に、**禪惠**が長老の任にあったことを実証的な根拠を示しつつ推論された。この推論は、その後、福島金治氏や兼好伝に係る考証過程で小川剛生氏などの支持・継承するところとなり、ほぼ確立しつつあるか、と考える。福島金治氏は、百瀬氏の論を踏まえて稱名寺文書などに確認できる「大量の不明僧は、おそらくは審海没後に尊定房が稱名寺長老になった際、内部の抗争の末に房総に移った僧たちであろう」と推定された（『金沢北条氏と稱名寺』1997:9 吉川弘文館）。

禪惠は**釵阿**を「請」じて最極秘大事を「付属」し、**丸**（秀

範)には伝授しなかった、と秀範が語ったことに留意する

ならば、次のように推測される。秀範自ら当事者として、最極秘大事を伝受されるに適う位置に居た、と自認していたように受け取れる内容である。即ち、禅恵の長老就任期間、「嘉元二年六月十三日の審海入滅後、延慶元年十一月に至る四年余りの間」は勿論、それ以前に亘る期間、少なくとも審海・禅恵の側近くに仕え、稱名寺に起居していたことを予想させる口吻でもある。こうした金沢稱名寺の内部対立の結果を秀範と師資相承の關係にあった覚道房円海にも認めることができそうである。福島氏が正応四年(一二九一)の稱名寺三重塔供養僧衆交名を分析した「審海時代の稱名寺僧侶」の中で、「形同沙弥」(3)他の寺院に移った僧に分類し、「極楽寺から久米田寺に移ったとみられる」と推測されたところの円海である(福島氏前掲書、頁161)。この「円海―秀範」の問題は、今後の課題である(その一端は、牧野和夫「善通寺藏『陀納深密口決』の通藏過程を巡って―良含・澄豪相伝本と東寺」(『寺院資料集』令和2年1月 臨川書店刊予定)他に展開しているが、近く開催される仏教文学会大会にても口頭発表予定。中世文学史などに著録される作品類との連関(延慶本『平家物語』生成過程や『太平記』生成過程など)に及ぶことになる。とくに兼好をめぐる徳治・延慶頃の「環境」

を軸にした展開に留意したい)。

(まきの かずお・実践女子大学教授)